

時代の眼

信（信頼）なくば立たず

青 井 和 夫

ベストセラーとなった『歴史の終わり』¹⁾において、政治的には民主主義、経済的には市場志向型経済へ収斂する動きが世界的にみられると主張した F. フクヤマが、それに続く書物として書いたのがここに取りあげる『信頼』²⁾であった。歴史が終った後、各国の繁栄の鍵を握るのは国民相互の信頼感であり、それを生み出す「自発的社交性」だというのである。

ここに自発的社交性といわれるものは、伝統的なコミュニティや集団の権威のもとで働く能力ではなく、新たに団体をつくり、そこに定められた委任事項の範囲内で共同する能力を指す。家族親族と国家の間に中間集団（組織体）をつくり、それを大きくしてうまく運営する能力である。

家族親族以外の他人をどれほど信頼するかを基準として、主要国を「低信頼社会」と「高信頼社会」に分けてみると、前者にはイタリア・フランス・中国（台湾・香港を含む）がはいり、後者には日本・ドイツ・アメリカがはいるといふ。韓国は日米をモデルにしているが、本質的には中国寄りに位置する。これら2組みのグループ分けには、意外感を持たれる人も多いだろう。

家族すらバラバラの個人に打ち砕こうとした社会主義諸国はいうまでもないが、低信頼社会では家族員しか信頼しないのだから、優れた他人を雇い入れてファミリービジネスを大企業に育てあげるのが難しい。したがって、大企業をつくろうとすれば、国家が助成するか国有にするかしかなく、こんどは能率が非常に悪くなる。こうして、一方に無数の弱小ファミリービジネスと、他方に少数の非能率的な巨大国営企業という、中間のない2極構造の鞍型分布が出現するのである。かりに大企業ができたとしても、権限を部下に委譲せずして創立者がいつまでもワンマンで居座り、従業員の自発性を殺してしまうことが多い。中国の数千年にわたる独裁王朝の没落と革命の繰り返しも、ここにその原因があるといえよう。

長子単独相続の日本、長男子優先的分割相続の韓国、男子均分相続の中国を並べてみると、日本のイエが永続性をもつものに対し、中国では家産の細分化や兄弟間の対立などにより、成功企業も3代目まで続かないのが多いようだ。正に「売家と唐様で書く三代目」である。家族以外は競争相手

か敵と考えるイタリア人，差しの関係での交渉や協力を嫌うフランス人も，多くはファミリービジネスで終りやすい。

では，高信頼社会の国々はどうか？ 現在のアメリカでは，かつての牧歌的な中間層的コミュニティはドンドン崩壊し，麻薬と犯罪が横行して危険極まりなく，事件はただちに提訴合戦となり，家族の解体もいちじるしい。人種対立のせいだとはいえ，銃を捨てることのできない国をどうして「高信頼社会」と呼べるだろうか？ また，多人種中のトップに立つ WASP は，少しでも有色人種の血が混じると除け者にされるので，人種が混交すればするほど減少の一途をたどり，ついには消滅する運命にある。これに対して中国では，髪の色や目の色はちがっていても片言の中国語がしゃべれ，曲りなりにも中国風的生活習慣が身につけば，等し並みに「漢族」とされるのであるから，中国の方がはるかに高信頼社会といわれるにふさわしい。人種問題はアメリカ社会を分裂させ崩壊させるが，中国では社会を統合し，漢族を増大させているからである³⁾。

また日本も，かつては世界でも最も安全で礼儀正しく正直な国だと信頼されていた。ところがバブル経済が崩壊してみると，住専問題をみても明らかなように，すべてが出鱈目だったことが判明した。阪神・淡路大震災は危機管理のお粗末さを暴露し，エイズ薬害問題では行政のマイナス面までが浮き彫りになっている。今日ほど，経済・政治・行政・警察・司法・マスメディア・教育・学術・医療から宗教に至るまで，日本のリーダー層がその信頼性を失墜している時代はない。そして，すべての論議が真実の追求ではなく，勝ち負けを争う「ゲーム」となっている。国会の議論も証人尋問も，裁判所での松本智津夫の罪状認否の留保も。

わけても私はオウム真理教事件を重視したい。なぜなら，「最終解脱者」とはもってのほかの大詐欺師が，LSD や覚醒剤やサリンまで使い，「宗教法人」という社会の盲点を利用して，金と権力と女を手に入れるために世人をたぶらかそうとしていたからである⁴⁾。

注

- 1) F. フクヤマ 1992 『歴史の終わり』上・下，渡部昇一訳，三笠書房。
- 2) Fukuyama, F. 1995 *Trust*, International Creative Management. (F. フクヤマ 1996 『「信」なくば立たず』加藤寛訳，三笠書房。)
- 3) 伊藤憲一 1994 「よみがえる獅子——中国」『文芸春秋』11月号。
- 4) くわしくは，青井和夫 1996 「成熟社会をめざして——読書遍歴」青井和夫編『世代間交流の理論と実践』長寿社会開発センター，を参照されたい。

(あおい・かずお 東京大学名誉教授)